エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２２２号

2020 年 10 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三
電話　080-1232－0905
http://encounter.agape.wig.jp/

佐生健光『キリスト教と称名』より（７）

教会と無教会

小西先生は日本基督教団に所属する牧師であり、同時に無教会主義の創始者である内村鑑三の弟子ともいわれる方であった。教会と無教会の違いはどこにあるか。

キリスト教によって救われるためには教会という組織に所属する必要がある。教会は世界の歴史の中に存在し続けてきたキリストの身体であり、我々はその身体に組み入れられた一員である。教会に属するものは、教会で行われる儀式、洗礼式や聖餐式に参加することが義務付けられる。これが、私の若いころ聞いた教会側の論理であった。

それに対し、無教会の主張は、信仰一本槍であった。人の義とされるのは信仰のみであり、他の何ものにもよらない、というものである。教会は、エクレシア即ちキリスト者の集まりを意味し、組織や様々な

礼典は、後から付け加えられたものである。だから、無教会も一つのエクレシアであり、ここにも独自の礼拝様式があるが、それらは救いとは無関係である、という主張であった。

この二つの主張を、先生はどのように、まとめておられるのか、それは私の関心事でもあった。先生の信仰は、無教会主義に近い、否、無教会主義そのものである、それなのに、何故、教会に所属しているのか、というのが一つの疑問でもあった。

あるとき、高円寺東教会員有志の一泊旅行会があったが、この話が誰からともなく、始められたことがあった。先生は結論的に次のような所信を強い調子で述べられた。

「人の義とされるのは、主の架かりたもうた十字架の贖いによる。他の何ものにもよらない。この信仰を教会という組織の中で確立するのが、高円寺東教会の存在意義である」と。私は、このお言葉で、充分に納得できたので、その後、いわゆる、教会論には無関心で今日に至っている。

しかし、先生の最晩年に、小西先生は石館先生ともご協議の上、高円寺東教会を解散することを決断された。私たちは、先生亡き後家の教会を作るか、他の集会に参加することとなった。教団関係の手続き

については、小沢辰夫兄、深谷秀夫兄が一手に引き受けられ、無事それを完了することができた。

小西先生のお宅で、第 1 回の家の教会の集まりが行われたとき、先生は隣室で床に伏せって、共に祈ってくださった。終わってから、病床にご挨拶に伺ったところ、「Hear」と一言嬉しそうに言われたのが忘れられない。それは私が先生にお目にかかった最後の時であった。

この「家の教会」は石館基兄に引き継がれ、今日に至っている。月 2 回、第 2 日曜日、第 4 日曜日に兄のお宅に集まる者 12 人ほど、主の御名を称えてはじめ、先生が残された説教のテープを聞き、感想を述べあい、主の御名を称えて終わり、たぬきそばの昼食を共にした集まりを続けてきた。差し支えある時は、小沢正兄宅に場所を変えて、既に 400 回を超えたところであるが、大変に恵まれた集会となっている。

一書の人を恐れよ

この言葉を、先生から何度かお聞きしたことがある。

つまり、一冊の書物を徹底して読みつくし、そこに書かれた真理を自分のものにした人を恐れよ、という意味であろう。

それは、如何にして聖書を読むべきかということについて、先生が我々にアドバイスをされたとき述べられた格言である。聖書に関する書物をあれこれと読み、聖書知識を積むのではなく、聖書そのものを熟読することが必要であるということである。

また、先生は、天理教の教祖であるおみきばあさんの「学者と金持ちおことわり」という言葉を時折紹介された。学者の真理探究の方法は、主題にかかわる資料を…収集して、一定の方法論に基づいてそれを整理し、そこに存在する法則性を見出して、一つの真理を探し当てる、というやり方である。だから資料や文献を幅広く収集し、それに目を通し考察を加えることは、不可欠な作業となる。だから、ここでは一書の人となることは考えられない。思うに、一書の人となることがアドバイスされるのは、学問の分野ではなく、信仰という分野においてではあるまいか。何となれば、救いという人の魂にかかわる問題については、学問の方法によって解くことは不可能だからである。

金持ちお断り

おみきばあさんに断わられたもう一人に、金持ちがいる。しかしながら、世のため人のために何かするには、お金が必要になる。多くのお金を使って、病人を癒し、飢えた人、気の毒な人に生きる望みをよみがえらせることは必要なことである。そのためにお金は多ければ多い程よいのであり、その意味で金持ちの存在は必要となる。だが、世界に飢えや病がなくなったとしても、人の魂は救われるわけではない。だから、魂の救いに関しては、「金持ちは関係ない」と、おみきばあさんは言っているのである。

世の営みの多くは、いかにしてこの社会をよくするか、楽しく心地よくするかが主要な目的となっている。政治、経済、学問、文化の目的もそこにあり、我々も、そのために日夜、努力を惜しまない。人間にとって、このことは必要事項であることは疑いない。しかし、そのためにどんなに奮闘努力しても、それで人が救われることにはならない。

学問の世界で真理を探求する方法も、世界を良くしようとする人間の営みも、いわば地上における問題である。それに対して、救いとは天上にかかわる問題である。…

一書とは聖書

「一書の人を恐れよ」という言葉は、そのような人の人格を畏敬せよ、という意味である。それは、深い意味を持つ言葉には違いないが、こと「救い」に関しては、そのような人の人格よりも、むしろ、その人知に一書である、書の内容の方が大事だと私は思うのである。私たちは、その人によって救われるのではなく、その人にとっての一書の言葉の中に、救いを見出そうとするのである。私たちにとって、一書とはいうまでもなく、聖書である。

その意味で、先生対私の関係は人格対人格の関係ではなく、先生が述べられる聖書の言葉対私の関係である。極端な言い方かもしれないが、私は小西先生がどんな人であったとしても、先生が述べられた聖書の言葉が自分にとって、救いの原理であるから先生とお呼びし、尊敬するのである。たとえ、先生が欠点だらけの人であったとしても、それは変わらないのであり、先生がどんな大人格者であったとしても、述べた言葉に救いの真理がなければ、先生とお呼びすることはなかったであろう。先生対私の関係は、他の先生の場合とは異なるのである。

先生の言われたことを実行すること

何時のことであったか。「我々がパウロは偉い人だ、偉い人だというばかりで、パウロの言ったことを行わなかったら、パウロは泣くじゃろうな」と、先生が私に言われたことがあった。今、私は思う。

「私が小西先生は偉い人だ、偉い人だとばかり言って、先生の言われたことをただ聞くだけであったら、先生はお泣きになるだろうな」と。

先生の言われたことを実行するとは、言うまでもなく、称名することである。

救いの方法は、ぼやっとしたものではいけない

イエスは、まず第１に、「心を盡し、精神を盡し、思いを盡して主なる汝の神を愛すべし」と言われた。このお言葉を実行するには、具体的に私たちはどうしたらよいのか。多くの人は、どうしたら神を愛せるのか、戸惑うに違いない。また、その方法が分かったとしても、どこまで実行したらよいのか、戸惑うに違いない。

第２に「おのれの如く汝の隣人を愛すべし」と言われた。このことも、隣人を具体的にどのように、どの程度愛したらよいのか、それは非常に難しいことであり、多くの人は、戸惑うことであろう。愛という行為は、どこまでという際限はなく、人間の行う愛は、たいていほどほどのところでしか行えないのが現状である。

先生は、日ごろ、「救いの方法は、ぼやっとしたものではいけない。どこをどう押したらよいか、はっきりしたものでなければならない」と言っておられた。称名するということは、主の御名を称えることによって、上記の第1、第2、のいずれも完全に行ったと、神がみなし給うことである。…だからこそ、主は「我が軛（くびき）は易く、わが荷は、軽ければなり」（マタイ伝 11・30）と言われたのである。私は、そう信ずる。

我が主イエスよと呼んで主の御国へ生まれる

ただ「往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞ」と思ひとりて申すほかには別の子細候はず但し三心・四修と申すことの候ふは皆決定して「南無阿弥陀仏にて往生するぞ」と思ふ中にこもり候ふなり（法然・一枚起請文より）

この、有名な言葉をキリスト教流に言い直してみると、次のようになるであろうか。

ただ、「永遠の命を頂くためには、わが主イエスよ、と、十字架の上に我が罪を贖い給うたイエスの御名を呼んで、疑いなく主の御国に生まれることができるのだ」と、思い称えるほかには、別に何もない。ただし、「心を盡し、思いを盡し、精神を盡し、汝の神を愛する」ことも、「汝の隣人を愛する」ことも「我が主イエスよ」主の御名を称えることの中にこもっているのである。

ロマ書 10 章 13 節には、同 9 節、10 節が含まれている、と、先生から教えて頂いたが、マタイ伝 22 章 37－40 節もこの中に含まれると言ってよいのである。

デビッドソンの言葉

先生は時折、ご自分が感銘を受けた人の言葉を紹介してくださった。そのうち、外国人の言葉で私の脳裏に深く残っている二つの例について書いておきたい。

An ordinary life lived well is the greatest of all deeds.

R.T.Davidson

立派な平凡な生涯は、すべての行為の中でもっとも偉大なことである。

R.T.Davidson(1848－1930)
英国の聖職者。スコットランド、長老教会の家に生まれた。オックスフォード大学卒。1903-1928、カンタベリー大主教を務める。

デビッドソンの言葉で私が感銘を受けたのは、立派な平凡な生涯は偉大である、とは言われずに、もっとも偉大であると言われた点である。

このことは、先生がいつも言っておられた「目の前に置かれたことを、全力をあげてなせ」という言葉を思い出させ、それはまた、「己が身を神の悦びたまふ潔き活ける供物として献げよ」というロマ書 12 章 1 節の言葉を想起させる。

デビッドソンの言葉(2)

すなわち平凡な生涯とは、自分の目の前におかれた誰でもできる仕事をし通した生涯であり、それを全力をあげて成し遂げた時、神の悦び給ふ潔き活ける供え物となり、その生涯が、人間にとって最も偉大な生涯となるということである。それは何故か。

自分が偉大であると思う行為は神の目から見れば、必ずしも偉大ではない、ということを意味する。自分が、目の前にあるなすべきことをなさず、他の偉大と思われることを求め、それに熱中することは、人間には偉大に見えても、神の意志に沿ったことではない、ということであろう。

神の意思に沿ったこととは何か。それは目の前に置かれた、今、なすべきことをなすということである。小西先生は、それを明確にお教えくださったのである。

私の目の前に置かれたことは、いかに平凡なことであろうとも、今、私のなすべきこととして神が置かれたことである。これを私が全力投球することは、神のみ心に沿ったことになる。それはルカ伝10章の「よきサマリア人」のたとえにある隣人に対する愛に相当する。…